

# 2024 China

文部科学省委託 令和6年度新時代の教育のための国際協働プログラム 初等中等教職員国際交流事業

## 中国政府日本教職員招へいプログラム 実施報告書



ACCU

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター



## はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU: Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）は、ユネスコの基本理念に基づき、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現を目指し、アジア太平洋の人々と協力して、文化と教育の分野で地域協力・交流活動を推進しています。

ACCU は、アジア太平洋地域の国々との相互理解と友好を促進することを目的に日本政府及び国際連合大学の協力のもと、2001年から教職員の国際教育交流事業を開始しました。この国際教育交流事業は、日本と韓国、中国、タイ及びインドとの間で行われ、これまでに4,500人以上の海外教職員を日本に招へいし、また日本からは1,200人以上の教職員を海外に派遣してきました。その結果、日韓・日中・日泰・日印間で、多くの教職員間交流および学校間交流が生まれ、これらの国々の相互理解と友好の増進に大きく貢献してきました。

今年度は、文部科学省委託事業「令和6年度初等中等教職員国際交流事業」の一環として、2024年11月15日、11月24日から11月30日、12月13日にかけて中国政府日本教職員派遣招へいプログラム（中国派遣プログラム）が行われました。このプログラムには、日中間の教職員交流に高い関心を持ち、公募によって選ばれた教職員等、計25名が参加しました。

参加者は、中国教育部への表敬訪問を行い、同国の教育事情や制度について説明を受けた後、北京市及び西安市にある教育行政機関、学校、教育文化施設を訪問し、中国の教育の現状と課題、訪問校の教育の特徴について学びました。また、中国の教職員や児童・生徒との交流も行いました。中国派遣プログラム終了後、参加者はそれぞれの所属機関での報告会を実施し、中国の学校とのオンライン交流など、各自のアクションプランに基づく取組を進めています。教育現場のチェンジメーカーとして、今後の活躍に期待が期待されています。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました中国教育部、文部科学省、中国教育国際交流協会をはじめとする関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

2025年3月

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）

# 目次

1. プログラム概要	1
2. 参加者による訪問記録	3
資料編	33
参加者リスト	33
プログラム関係機関	34

# 1. プログラム概要

## 1. 実施の背景

日本と中国との間の国際交流事業としては、2002年に中国から初等中等教育教職員を招へいたことを皮切りに、2003年からはさらなる交流を促進するため、日本の初等中等教育教職員が中国を訪問するプログラムを実施してきました。これにより、2025年3月までに、合わせて2,200人以上の日中教職員がお互いの国へ派遣され、コロナ禍ではオンラインを通じた交流も行われました。令和6年度は、中国教育部の協力のもと、文部科学省委託「初等中等教職員国際交流事業」の一環として、25名の教職員等が中国を訪問しました。

## 2. 目的

- 1) 中国の教育事情に関する知識を得て、中国に対する理解を深めること
- 2) 学校間の連携のため、日中教職員間のネットワークを構築すること
- 3) 日中教職員間で参加者がそれぞれの考えや教育実践を共有し、対話すること

## 3. 活動内容

- 1) 学校等の教育機関の訪問
- 2) 中国の教職員及び児童・生徒との教育現場での交流・意見交換
- 3) 教育文化施設の視察
- 4) 現地滞在前後のオンラインオリエンテーション及びリフレクション

## 4. 日程

- オリエンテーション：2024年11月15日（金）
- 出発前オリエンテーション：2024年11月24日（日）
- 中国滞在：2024年11月25日（月）～11月30日（土）〔6日間〕
- フォローアップミーティング：2024年12月13日（金）

日付	日程	場所	活動
11月15日（金）	事前	オンライン	オリエンテーション （中国の教育事情についての講義を含む）
11月24日（日）	事前	羽田空港周辺	出発前オリエンテーション
11月25日（月）	第1日目	北京市	出国（羽田空港→北京首都国際空港） 前門大街見学 歓迎会
11月26日（火）	第2日目	北京市	中国教育部表敬訪問 北京景山学校大興実験学校訪問 天壇見学
11月27日（水）	第3日目	北京市／西安市	北京首都国際空港→西安咸陽国際空港 西安市教育局表敬訪問 西安電子科学技術大学訪問

11月28日(木)	第4日目	西安市	西安交通大学附属中学校(曲江キャンパス)訪問 兵馬俑博物館見学 舞台劇『西安千古情』鑑賞
11月29日(金)	第5日目	北京市/西安市	西安市第三中学校訪問 閉会式
11月30日(土)	第6日目	北京市	帰国(北京首都国際空港→羽田空港)
12月13日(金)	事後	オンライン	フォローアップミーティング

## 5.参加者

下記の教職員、随行員の計25名。

- ・公募により選抜された、自治体または学校の教職員23名程度
- ・文部科学省、ACCUの職員各1名

## 6.参加資格

- 1) 日本国籍を有すること。
- 2) 応募時に有効なパスポートを所有していること。(入国時に6ヶ月以上有効なパスポートであること。)
- 3) 所属する教育長・学校長等から推薦を受けた、初等中等教育教職員(教育行政職員を含む)であること。(団長についてはこの限りではない。)
- 4) 健康で、オンラインを含めたプログラムの全日程に参加が可能であること。
- 5) プログラム期間中の意見交換や文化交流活動に積極的に参加できること。
- 6) プログラム期間中の学びや知見を帰国後に児童生徒や学校、地域に伝える役割を担えること。
- 7) 将来にわたり中国との教育交流の推進に寄与できること。特に、中国との学校・教員・児童生徒・地域間の交流、または定期的な情報交換等を推進する立場にある者が望ましい。
- 8) 団体行動の規律を守り、主体性を持って積極的にプログラムに参加できること。
- 9) 習慣や文化の異なる国との交流であることを理解し、突然の変更などにも柔軟に対応できること。
- 10) EメールやWeChatを用いて円滑に連絡ができ、またMicrosoft Word/Excel/PowerPointを用いて所定フォーマットに必要情報を入力し提出できること。
- 11) オンライン交流に必要なPCや通信環境を準備し、活用できること。
- 12) 出発前オリエンテーション(日本国内)から中国の現地、日本帰国に至るまで、参加者負担によるポケットWi-FiやSIMカード、e-SIM等により、携帯電話やスマートフォンなどの通信環境を整え、EメールやWeChat等で常に連絡が取り合える状況でいられること(通話を含む)。
- 13) 主催者や実施運営団体の指定する報告書やアクションプランなどを提出できること。

## 2. 参加者による訪問記録

(記録系の報告書から一部抜粋して掲載。)

### 前門大街見学 (11月25日)

#### 【特色】

前門大街は、中華人民共和国北京市の中心部を南北に貫く大通りである。正陽門から天橋路口まで、およそ1キロメートルにわたって続き、西城区と東城区の境界をなしている。

前門大街の歴史は古く、明清時代から続く商業地区として栄えてきた。かつては「五牌楼」と呼ばれ、通りの入口に荘厳な牌楼が立ち並んでいた。しかし、時代の変遷とともに街並みは変化し、1958年の都市改造によって多くの古い建物が失われた。

2008年の北京オリンピックを機に、前門大街は大幅な再開発が行われ、歴史的建造物を復元しながら、現代的な都市空間へと生まれ変わった。清代末期から民国時代初期の町並みを再現した歩行者天国となり、国内外の観光客から注目を集めるようになった。

前門大街の魅力は、歴史と現代が融合している点にある。全聚徳や同仁堂など、中国を代表する老舗が軒を連ね、伝統的な北京の味を堪能できる一方で、現代的なショップやレストランも数多く出店している。

特に注目すべきは、2009年から運行されている路面電車「铛铛車」である。前門大街は、単なる商業施設ではなく、北京の文化に触れることができる場所でもある。ここでは、北京の人々の暮らしや文化を垣間見ることができる。



#### 【プログラムの流れ】

見学では、各々が前門大街周辺を見学した。非常に寒く、現地の人でも寒いと感じる一日だったそうだが、メインの通り周辺は多くの人で賑わっていた。



日本では、地域によって、その地に集まる人々の年齢層が分かれる場合もあるが、前門大街では老若男女、とりわけ家族と思われるグループが多く見られた。訪中団のメンバーから「前門大街は、中国の浅草なみたいな場所」と聞いたが、確かにそのように感じる部分もあった。そんな「中国の浅草」とも言われる前門大街のメインの通りには、文具店や菓子店、料理店などお店が立ち並んでいた。尚、中国では電

子決済が主流であるが、現金での支払いも可能であった。

個人的には、メインの通りよりも、一筋、二筋離れた通りに魅力を感じた。通りの幅は細く、(おそらく)そこに住んでいるのであろう人たちが行き交っていた。

メインの通りと離れの通りとの違いは、通りの幅の広狭だけでなく、警察の数にも大きな差があった。メインの通りでは、随時、警察が(おそらく、各自割り当てられた区間を)巡回していた。また、その数は多く、日本の繁華街とは比べ物にならないほどであった。



#### 【所感】

当日は、寒波が到来したとのことで、非常に寒かった。頬に当たる風には、「冷たい」というよりも「痛い」という感覚を覚えた。空には雲が微かにみられる程度で、青空が広がっていた。

現代的なお店と老舗が共存する空間が素敵だった。また、メインの通りは栄えているが、一本通りを中に入ると人通りが少なくなる所もあり、半径 100m 以内の空間に異なる熱量と多様な空気感が漂っていた。

メインの通りに交差する通りの奥に目をやると、一つ一つ表情が異なる石が積み重ねられた、石造建築独特の外見的美しさと面白さが見られた。また、メインの通りから離れるにつれて、通りの幅がかなり細くなり、特に細い通りでは、体感的には幅 3 m もないよう感じられた。そして、その細い通りをバイクや自転車が行き交うわけであるが、その中に身を置くと、北京の日常の一コマに触れている(包まれている)ような素朴な感覚を覚えた。

前門大街は広く見渡しても美しく、どこか一点を凝視してもそこに美があり、まさに、マクロな視点とミクロな視点の両方で楽しませてくれる地域であった。

## 中国教育部表敬訪問（11月26日）

### 【特色】

教育部は、中国の教育行政を司る政府機関である。

#### 【教育部の主な役割】

- ①教育政策の策定：中国の教育に関する長期的なビジョンや具体的な政策を立案し、教育の質向上を目指す。
- ②教育制度の管理：小学校から大学院までの教育制度を管理し、各段階の教育内容や基準を定める。
- ③教育機関の監督：学校や大学の運営状況を監督し、教育の質の確保に努める。
- ④教育に関する法律・規則の制定：教育に関する法律や規則を制定し、教育活動の法的根拠を確立する。
- ⑤国際教育交流：外国の教育機関との交流を促進し、国際的な教育協力を行う。

### 【プログラムの流れ】

#### 1. 開会挨拶

賈鵬副司長が、日本基礎教育教職員団の訪中を歓迎し、今回の訪問が4年ぶりの相互訪問再開であること、中国教育部が今回の訪問を重要視していることを述べた。

#### 2. 訪中団代表挨拶

訪問団団長が謝意を表し、訪中団の構成や中日友好の展望について述べた。日本教職員が、中国における基礎教育の目覚ましい発展、デジタル化や教員の養成への取り組みを評価し、日中の教育における相互学習への期待を表明した。

#### 3. 司長挨拶、中国の教育事情について

馬嘉賓司長が、本交流事業の淵源と歴史について説明した。中国の基礎教育の現状について説明し、中国の教育において特に重要視されている6つの点について言及した。具体的には、品德教育、質の高い教育の提供、教育の公平性、改革とイノベーションの促進、教育のデジタル化、そして協働と対外交流である。





#### 4. 質疑応答

・質問1：グローバル化が進む中で、日本では多様性の尊重や相互理解、協働が重要視されているが、中国における国際的な教育交流や外国語教育、国際協力などの現状はどのようなものか。また、今後注力する分野やテーマはどのようなものか。

回答：小学校から正確に世界を認識することを重視しており、外国語教育を重視している。具体的には、小学校から英語教育を開始し、日本語やフランス語を教える学校もある。政府や学校は、生徒が海外へ行くための国際プログラムを提供することを重要視している。国内の姉妹校は1万校を超え、双方向の交流が行われている。また、デジタル技術や人工知能を国際交流の重点に置き、デジタル化を通じて教育レベルの向上を目指している（日本との協力も視野に入れている）。

・質問2：日本では単なる知識・技能の習得ではなく課題解決力を身に付けるために、「総合的な学習の時間」や「探究的な学習の時間」において探究的な学びが行われている。中国における探究的な学びの取組や、学校教育で身に付けさせたいスキルや資質・能力はどのようなものか。

回答：実践的な学習、探究的な学習、そして総合的な学習を重視している。知識の構築と発展を重視し、学びながら経験し、生活と結びつけ、世界と繋がり、楽しく問題解決をすることを目指している。テーマの実践やディスカッションなどを通じて、総合的な素養の向上を目指している。

・質問3：日本でもデジタル化が進む中で小学生段階からタブレットパソコンが支給され、スマホの普及にも相まって漢字や作文などの手書きでの学習や直接的なコミュニケーションに苦手意識をもつ子どもたちが増えてきている。また、外国籍児童も増えてきており、学びの多様化の中でデジタル機器の活用が課題となってきた。中国におけるデジタル化の状況を教えていただきたい。またアナログとのバランスをどのように考えているか。

回答：学校にはコンピュータ室が整備されているため、タブレットは生徒に支給されていないが、一部の学校では支給されているケースもある。スマートフォンは校内への持ち込みが禁止されている。タブレットやスマートフォンの導入にはメリットとデメリットがあり、不適切な使用による生徒の成長への悪影響も懸念される。情報技術の科目を設置し、現代の情報技術の利用方法や知識を正しく学ぶ機会を提供している。技術を正しく理解し、正しく使うことが重要であり、学校では対面でのコミュニ

ケーションを重視している。デジタル化が進む中で、作文や口頭発表の能力強化のために、作文の授業や全国読書イベントを開催している。

#### 5. 閉会並びに贈呈品授受、写真撮影

賈鵬副司長ならびに訪問団団長が互いに謝意述べ、最後に馬司長と訪問団団長が贈呈品の授受を行った。閉会后に階段にて、一同で記念撮影を行った。



#### 【所感】

教育部訪問を通して、下記の重要性を学ぶことができた。

##### ① [公平の意識と「互助」に基づく行動] について

中国においても、都市部と農村部において教育格差が生じている。そのため、中国教育部では、貧困家庭への支援や、都市部と農村部における教育格差の是正に注力しているとのことであった。

具体的には、中国国内には1万校を超える姉妹校があり、中心部と農村部の学校間などにおいて双方向交流が行われているとのことである。周恩来総理と鄧穎超婦人の「八互原則」は有名であるが、中国の教育ではこの「八互原則」に通ずる教育活動が展開されていると感じた。

特段、感動したのは「互助」の意識とそれに基づく教育活動である。中国では、中心部の優秀な教員を中西部、農村部などに大量に派遣しているそうである。教育のデジタル化を重視し、それらに注力する中国ではあるが、デジタルだけでなく、アナログ（教師という人的支援）による教育の公平化を目指す教育政策の在り方に深い感銘を受けた。

昨今、教育だけでなく、人類の諸活動において「誰一人取り残さない」意識とそれに基づく行動が求められている。その潮流にあって、中国の教育政策からは、「誰一人取り残さない」社会の実現に向けた意識（使命感）が感じられ、その尊き意識に基づいた行動（事業）が展開されていると感じた。

今まで、自身としても「誰一人取り残さない」教育活動を心がけてきたつもりではあったが、今回の教育部訪問を通して、自らの行動をさらに発展させ、深化させるヒントを得ることができた。今後は、困難を抱える生徒や保護者を受け入れる行動や、その人たちの声を聴く行動から脱却し、そのような人々のもとへ向かっていく、聴きに行く行動に転じていきたいと考える。

## 北京景山学校大興実験学校訪問（11月26日）①

### 【特色】

「北京景山学校」は北京市内に複数キャンパスを持つ名門校。設立当初から教育改革を積極的に行っており、常に新しい教育方法を模索している。特に、学生の自主性や創造性を育む教育に力を入れているという。学生を中心とした教育を重視し、高水準の運動場、実験室、コンピュータ室、図書館など教育に適した環境整備されている。

今回の訪問校は、「北京景山学校大興実験学校」という名称で、大興区に設立させた学校である。景山学校教員の話によると、設立13年目。大興区は北京市南部に位置する市轄区で、近年、北京経済技術開発区（亦荘）や北京大興国際空港の開港などで注目を集めている地域である。近年特に開発が進んでいる地域であり、教育機関も整備されつつある。そのため、北京市内中心部に比べると新しい学校が多い。学校の周りには、住宅や病院などが多い。

全校生徒2542人。一クラス約40名の生徒。教員数171名。この学校では、小学校5年間、中学校では4年としていて珍しいのだという。校長は1名、副校長は3名。党組織の書記もいる。（校長先生の話から）

校訓：明理勤奮严谨创新（道理を明らかにし、勤勉に励み、厳格に、そして創造的に）



鄧小平が「教育要面向现代化 面向世界 面向未来（教育は現代化、世界、未来に向かうべき）」と揮毫（書に書いた。）



## 【プログラムの流れ】

### (1) 校内見学

本研修第一の見学校である北京景山学校大興実験学校。威容を誇る校舎が我々を迎えてくれた。その校舎には、「教育要面向现代化 面向世界 面向未来」という鄧小平の書や、中小生守則、北京市中小生日常行為模範などが示されていた。

また、校訓「明理勤奮严谨创新」や社会主義核心価値観なども、示され、教育を施し、国民が団結し、社会全体で突き進む中国の姿勢を強く感じた。愛国心を高めるような掲示や活動も多く見られた。

校舎校庭も大変立派であるが、ところどころにバトミントンスペースや卓球台があるところが中国らしい。子どもたちの運動や心の道理を明らかにし、勤勉に励み、厳格に、そして創造的にリフレッシュなどを大切にしているという。また、趣味や楽しみの多様性を尊重している様子もうかがえる。校内の廊下等のスペースには、児童生徒の作品が数多く展示されていた。



各種活動の記録（賞）、芸術作品、交流活動、学校の歴史を紹介する部屋があった。学校の歴史や特色を重んじ、自分たちの学校活動、教育活動に自信を持っている様子が感じられた。



また、「情緒調節室」や「心理補導室」という教室があり、子どもたちのメンタルケアにも力を入れている様子。メンタリティ活動として、人形を使った表現活動やサンドアート、優しく響く音楽など、心を整える場が作られていた。さらに、「教職員の家」と呼ばれる教職員用の休憩室があり、フィットネスや娯楽ができるような環境も整っていた。生活、仕事、教育の根幹の心の部分を大切にしている。「シェイクスピアの言葉『心の準備が整えば、何でもやりとげることができる』の言葉の通りである。だから、いつでも笑顔・スマイルでいてください。」と校長先生がおっしゃっていた。

すべての階にピアノが設置されているという。子どもたちが自由な表現活動ができる機会づくりをしている。音楽だけでなく、芸術、文化に触れる環境が多くあった。

## (2) 体育館にて、小中学生による学習発表の見学

- ①縄跳びのダンス
- ②空手の演舞
- ③詩の朗読・歌唱
- ④日本教職員団による「ふるさと」の合唱



## (3) 教職員との交流

### ①学校紹介の動画の視聴

校長先生より、我々日本教職員団へのプレゼント紹介を受ける。子どもたちが作成した、数々の品物である。一人一人違うデザインの心温まるプレゼントであった。

学校紹介映像の内容が、小学2年の女の子と新人教師の成長の過程をモチーフに制作されていた。新人教員への支援体制や研修、また生徒の教育活動の多様性（運動、文化芸術、体験活動、共産党教育など）と見取ることができた。



### ②質疑応答

【質問】（日本教職員）先生のチームワークづくりについて工夫しているところはあるか。日本では組織作りに課題を抱えている学校も多いのだが・・・。

【回答】（景山学校教員）本校は設立して13年。教員数は171名。平均年齢は34歳で若手の多い学校。毎年新しい先生が入ってくるので、その際に、先輩の先生が新人の先生に対して指導し、どうやって授業をするのか、教師という仕事についてじっくりと教えている。3年間で教師としての基本的な力を身につけ、5年目には中堅教員になれるようにしている。また、市や区の教育専門家を派遣してもらい、教育の理念について指導を受ける。教育方法についても研究をし、その成果をお互いにプレゼンテーション・発表をしている。若い教師も自分の夢を持ち、子どもたちを立派な人材に育てることを使命として働いている。特に本校では、「常に頂点を目指すこと」を掲げて教育をしている。そのために人に先んじて行動し、困難に向かって歩み、向上心をもつ子どもの育成を目指している。教師は、子ども中心に教育活動をしている。

【質問】（日本教職員）教師の休憩室である「教職員の家」があったが、どのように設置に至ったのか。校長のリーダーシップをもとに設置されたのか。中国では、制度として設置が決められているのか。また組合組織などはあるのか。

【回答】（景山学校校長）休憩室を設けるといのは、教職員に対するケアをするためである。学校によって名称は異なるが、本校では「教職員の家」と名付けている。

組合組織については、簡単に言えば、教師をケアする組織がある。キーワードは「一つの家族」。感覚的には、実家（特に嫁の実家）の人々のように、特に深い関係性を目指している。行事で協力し合ったり、悩みがあるときは助け合ったりできる組織作りをしている。そのためのアクティビティがいくつかあり、例えば一緒に映画を鑑賞したり、合唱をしたりすることでストレスがたまらず、いつも元気に働くことができるように組織がある。メンバーは学校の教職員である。

（景山学校教員）教える仕事の一方で、教職員の権利を守る組織、冠婚葬祭を含め生活を守る役割がある。日本には、同じようなものはないのか。

（日本教職員）日本ではそこまでのケアはない。メンタルヘルス、カウンセリングを目的とした部屋は各学校にはない。

（景山学校教員）中国では、基本的に会社などでも、こうした環境は整えられていることが多い。

（日本教職員）日本でも会社では設置されている場合もある。

（景山学校教員）先生方の幸福感をアップさせることは大切である。

【質問】（日本教職員）心のケアの部屋があることが印象的だった。日本では、不登校の子どもが増え、問題になっている。中国ではどうか。

【回答】（景山学校教員）中国には、9年間の義務教育という制度がある。だから、権利でもあり、国民の義務でもある。子どもたちが、ちゃんと学校に通えるように取り組んでいる。

（景山学校教員）今の中国では、不登校の生徒はいない。もし、不登校の生徒がいるならば、学校と家庭が連携して何とか学校に来させるように対策を講じる。

（日本教職員）日本でも家庭と連携しているが、不登校は年々増えている。家庭との連携が、要因の一つかもしれない。

（景山学校校長）家庭、学校、社会の連携は不可欠である。その連携を行うことで教育を推進する。教育とはだれか一人の仕事ではなくて、みんなで責任をもって一緒に取り組むものである。

### 【所感】

北京景山学校大興実験学校の訪問は、我々にとって初めての中国訪問校であったこともあり、特に印象深い。たくさんの学びの中でも、2つについて紹介したい。

一つ目は、「一律と多様」である。相反するようなことではあるが、学校方針や指針、規律など、中国国民として共産党員として目指すべき姿に軸がある。教育の軸、学校の軸がしっかりとあるため、校長先生はじめ、他教員も自信に満ちているように感じた。私は自分のしていることに自信が持っているか、日本の教員はどうだろうかと考えてしまった。一斉教育や一律指導の一方で、子どもたちの活動の多様性を感じることもできた。体育館で見せてくれた発表、学校紹介、校内のところどころに見られた芸術文化運

動の環境整備。学業だけでなく、心も体も育てる環境づくりを感じた。

上記とも関連するが、二つ目は「心の在り方」だ。メンタルケアルームを紹介していただいた時に、校長先生がおっしゃった「心の準備を整えば、何でもやりとげることができる」の言葉の通りである。校長先生自身も、いつでも笑顔・スマイルだった。子どもたちも教職員もすべては、心理的安定性が原点である。不登校はいないと言い切った中国教育の根幹に、心のケアと心の教育が表れているのではないかと感じる。困ったときには助け合い、同じ学び舎のもとに家族を作る。それが学校だと教えていただいた。私たちはどうだろうか。正しさや、やらなきゃいけないこと、周りとの比較や当たり前や常識に、本来あるべき「心の在り方」を忘れていないだろうか。ある意味身動き取れず自分自身を見失いながら生きているのは、我々日本人のほうではないかとさえ感じた。

「心の準備を整えば、何でもやりとげることができる」すべての原点がここに詰まっているように感じた。教育は、思ったよりもシンプルなものなのかもしれない。

## 北京景山学校大興実験学校訪問（11月26日）②

### 【プログラムの流れ】

#### (1) 校内見学

北京景山学校は、中国北京市東城区にある小学校、中学校、高校を統合した学校である。1960年の春に設立され、1977年に全国の主要学校になり、1978年に北京の重要学校になった。南キャンパスと北キャンパスの2つのキャンパスがあり、校長は1名、副校長が2名いる。2013年現在、小学校から高校までの12学年、生徒数は2,400人在籍している。

2013年現在、学校には合計54の教室があり、高解像度プロジェクター、デジタルブース、コンピュータ、DVD、ビデオレコーダー、カードホルダー、オーディオなどのマルチメディアアプリケーションプラットフォームの完全なセットが装備されている。また、ネットワーク、USB、およびラップトップビデオインターフェイスも提供している。通常の教室に加えて、学校には音楽教室、書道教室、写真教室、中国絵画教室、スケッチ教室、物理教室、裁縫教室、自動車原理、模型飛行機教室など、12以上の専門教室がある。2010年以来、学校のサーバー仮想化の構築を実施してきており、さまざまな教室、オフィス、コンピュータールーム、専門教室を接続している。学校にはスタジオ、録音教室、録音スタジオ、ネットワークセンター、図書館(80,000冊の本を所蔵)、教師の読書室があり、最新のソフトウェア環境も備わっている。

校内の廊下等のスペースには、児童生徒の作品が数多く展示されており、児童生徒の学習の成果を大切にすると共に、お互いに学び合い、切磋琢磨している様子が見ええる。クラブ活動も多岐に渡り、学校の歴史を紹介する施設には、数え切れないほどの賞状やトロフィー等が展示されている。

また校舎の屋上には植物園があり、憩いの場所になっている。

### 【所感】

子どもたちが自分のやりたいことに、真剣に取り組んでいる姿が印象的だった。また数々の賞を受賞していることから、学業だけでなく多岐に渡る方面で活躍している子どもたちが多く、目標をもって日々生活していることがわかった。そこには、「常にトッ

プを目指す」ことを目標にして、何事にも向上心を持つことの大切さや、人に先んじて行動することの大切さを先生方が念頭に置いて指導していることが体現されているということが良くわかった。

さらに先生方も、子どもたちに寄り添い、悩みを聞いたり、不安を解消されたりしていることもわかった。

学習指導においては、授業研究を熱心に行いながら、教育に励んでいることがわかった。その中で、教師の働く環境にも配慮し、先生方も生き生きと働ける場作りがなされていると感じた。

子どもたちの授業は見られなかったが、運動場で体育の授業をしている姿や、縄跳びや、空手、朗読劇を見せていただいて、中国の教育力の高さを感じることができた。

## 天壇見学（11月26日）

### 【所感】

天壇：天に祈りを捧げた聖地

天壇は、中華人民共和国北京市東城区に位置する、明朝から清朝にかけての皇帝が天に祭祀を行った宗教的な施設である。1998年にユネスコの世界遺産に登録され、中国の伝統建築の粋を集めた壮大な建築群として知られている。

天壇は、文字通り「天に祈る壇」という意味を持ち、皇帝が天に祈りを捧げ、国の平和と豊穡を願った聖地である。天壇の建築物は、その思想を反映しており、天は円く、地は方形という古代中国の宇宙観に基づいた設計となっている。

とくに、祈年殿は、天円地方の思想に基づいて設計されているため、上部は円形、下部は方形となっている。3段の円形基壇の上に建ち、釘を一本も使わずに28本の柱で支えられている。祈年殿の中央の4本の柱は四季を、周囲の12本の金柱は12ヶ月を象徴し、宇宙の秩序を表現している。



### 【プログラムの流れ】

各自、天壇公園内、とりわけ祈年殿周辺を見学した。周囲には、コスプレ撮影をしている人々が多数見られた。一方で、寒さのあまり、泣きながら過ごしている子供もいた（その子供もコスプレをしていた）。



祈年殿の近くの建物では、祈年殿展が開催されており、祈年殿の模型や天壇に関する資料などが展示されていた。

訪中団のメンバーの中には、祈年殿をバックに写真を撮ったり、先述の展示を熱心に見つめたりするなどしている者もいた。また、現地の人と一緒に写真に入るなどしている者もいた。

見学時間は短かったが、ワイヤレスイヤフォンが支給されたおかげで、ガイドの説明を聞きながら、各々が自分の興味あるところを重点的に見学することができた。

### 【所感】

天壇は、想像をはるかに超える壮大なスケールであった。祈年殿の円形の屋根は、ま

るで天に向かって開かれた蓮の花のようであり、その青みがかった琉璃瓦が冬の澄んだ空気の中でひととき輝いていた。

天壇は、単なる観光地ではなく、中国の人々の信仰心の深さを教えてくれる場所であると感じた。また、古代中国の建築技術の素晴らしさにも感心した。

今回の天壇訪問で、特に印象に残ったのは、その静寂さである。祈年殿周辺は多くの人で賑わっていたが、祈年殿の中を見つめると、不思議と静寂に包まれるような感覚を覚えた。

建築には「人を守る」という機能が求められるが、祈年殿には、建築物に対する造形的な工夫だけでなく、その周囲（環境）と祈禱者との距離にも配慮がなされていると感じた。

非常に寒く、体が冷え切っており、なかなか厳しい環境下ではあったが、都会の喧騒から離れ、広大な空間の中で自分自身と向き合うことができる貴重な時間になったと思う。

私たちに歴史と自然、そして信仰の大切さを教えてくれる重要な場所・天壇。機会があれば、再び訪れ、じっくりとその魅力を味わいたいと思う。

## 西安市教育局表敬訪問（11月27日）

### 【特色】



西安市は、北京から飛行機で南西へ2時間半あまり、中国のほぼ中心の位置にある陝西省の省都である。

西安の歴史は、紀元前11世紀に遡り、それからおよそ2000年もの間、13の王朝によってこの地が都とされてきた。なかでも周、漢、隋、唐の各王朝の首都として約300年に渡って栄えた長安は、唐の時代には人口100万人を超える大都市であったという。また、

ここはシルクロードの起点となったことでも有名で、西方との交易に関わる国際都市の役割も果たしていた。

また、西安は日本との関わりも深く、阿倍仲麻呂、空海、日本からの遣隋使や遣唐使などによって結ばれ、多くの人的、文化的交流があった。平城京、平安京は長安に倣ったとも言われている。



### 【プログラムの流れ】

12月27日午後、訪問団は西安市教育局を表敬訪問した。訪問先のビルには、「中国教育テレビ」や「西安教育テレビ」、「西安市中小學生研学旅行實踐（實踐）教育基地」などの機関が入っており、西安市の教育の中核基地のような趣であった。



### [西安市教育局表敬訪問]

西安市教育局からは、王副教育長を始め6人の方のご出席を頂いての交流となった。

- ①参加者紹介
- ②西安市の教育についてのVIDEO視聴
- ③王副教育長より挨拶と西安市の教育について紹介

### ★西安について

西安は中華民族の発祥の地であり、歴史的、文化的観光資源が多く、「天然の歴史博物館」という名にふさわしい街である。

遥か3000年前の都であった長安は、文化、経済、政治の中心地であり、シルクロードなどを通じて多くの国々と政治的、経済的交流を行っていた。その伝統を受けて、近代の西安も、中国対外開放の重要な入り口として開放的発展を進めている。

### ★西安の教育について

西安は教育メソッドも豊富で、数多くの大学や研究機構を有し、中国の科学技術のイノベーション拠点となっている。歴史的にも、昔の国学書院から現在の大学に至るまで、長い教育の歴史と豊かな文化がある。

近年は、教育を非常に重視しており、政策上の便宜、交通の利、科学技術の蓄積、豊かな文化、教育のリソースに恵まれた



大都市となっている。全国でも「教育のまち」「大学のまち」「技術のまち」として有名である。

学校関係者との交流で、西安の基礎教育の改革と発展について語り合うと共に、本市の文化的魅力もご体験頂きたい。

#### ④訪問団団長挨拶

中国、日本は共に、教育は国の未来を創るものと位置付けている共通点がある。その教育に携わる両国の教育機関、教職員の交流は、両国の万代に渡る友好の礎になるであろう。西安は長安の都の昔からシルクロードを通じたグローバル化を加速させた歴史がある。今回の訪問も西安から日本へのシルクロードを築いて、両国の抱える教育課題の解決に向けた教育のイノベーションを加速させるのも西安から日本へのシルクロードを築いて、両国の抱える教育課題の解決に向けた教育のイノベーションを加速させるものと信じている。今回の訪問を機に益々交流が深まることを願っている。

#### ⑤質問・交流

Q.西安には多くの博物館など文化施設があるとお聞きしたが、そういった文化財を生かした校外学習は小中学校のカリキュラムに入れているか。



A.西安市の基礎教育では、教室での授業の他に校外で実践を行うカリキュラムである研修実践科目がある。博物館や科学技術館などの機関が連携し、学生が見学学習をすることができる。指定された博物館は受け入れを業務のひとつとしている。また、校外学習としてではなく、博物館を校内に取り入れる動きもある。例えばある小学校では、博物館を教室に入れて学ぶカリキュラムを実践している。さらに、長期休暇には、教育局から依頼をし、小中学生の無料での受け入れを整えている。西安教育局、旅行局、文物局が協力し、管轄内 80 カ所の機関を小中学校の研修基地に定めている。「西安市中小学生研学旅行实践（实践）教育基地」の看板を掲げたこのビルもその中のひとつである。

Q.西安には科学技術の進歩と、歴史の地の両面があるが、音楽の授業では伝統的な音楽や楽器を学んでいるか。また、どのような楽器を扱っているか。

A.基礎教育、高校も含めて、国の定める音楽のカリキュラム以外に、二胡、琵琶、琴などの民族楽器を扱った授業もある。授業以外には、課外活動も行っている。午後 4 時以降に小中学校ではサークル活動があり、先ほどの民族楽器以外にも、トランペットやギターなどの楽器を教えているところもある。

Q.中国の専門学校には武術の学校などもあると聞かすが、他にはどんな種類の学校があるか。

A.教育局には、体育、衛生、芸術を管理する部署も置かれている。音楽、武術などの伝統文化は、小学校では主にサークルの中で取り扱っている。それ以外にも美術、技術、陶芸などを、学生の趣味に合わせて行っている。学校以外では、日本でいう塾のような営利的な機関が補足的な位置づけで武術、芸術を専門的に教えている。

Q.西安では科学技術に力を入れているそうだが、小中学校ではどのような取り組みをされているか。

A.小学校では、技術科学の授業の設置が国によって定められている。1、2年は週1回、3～6年生は、週2回、専門の教師による授業を行っている。

高校では、通常の授業以外に研修プログラムも組んでおり、その中で技術関係の研修が経験できる。例えば、陝西師範大学附属学校では、大学の研修者と共に山などに赴き、自然に関する研究を実践する機会を設けている。

一方で学校内でもラボ、実験室などの設備を整備している。高校では物理、化学など技術関係の授業があり、学習のさらなる向上と学生の関心の向上を目指してコンクール、実験などを行っている。科学イノベーションの実績も上げている。全国のイノベーション大会に推薦校を出し、実績を上げている。



Q.国際交流にも力を入れているとお聞きしたが、取り組みについて教えてください。

A.実施の主体は学校で、積極的に国際コンクールなどに参加する学校もある。教育局は奨励する立場にある。

政府の海外友好都市にある学校間での交流も行われており、オンラインまたはオフラインで、技術、芸術、音楽などの交流やコンクールなどを行うことがある。

西安は国際交流を重視しており、学生訪問団を連れて日本（友好姉妹都市の船橋市）を訪れたこともある。訪問を通して日本の小中学校の基礎教育の体制がよく整っているという印象を受けた。今回の訪問を機に学校、学生間の交流が進められると嬉しい。交流は友情を深めるよい手段であると考えている。

#### ⑥王副教育長と訪問団団長による記念品交換



西安市では、前日に中国教育部で伺った説明の中にもあった科学技術におけるイノベ

ーションと国際的教育の推進に特に力を入れているという印象を受けた。

#### 〔科学技術におけるイノベーションの促進〕

省内には多くの大学や研究機関がある。それらと連携し、科学技術教育を推進できる環境にある西安は、人的リソースにも大変恵まれていると感じた。

#### 〔歴史的、文化的資源と国際教育〕

歴史的にも長安の都の時代からシルクロードを通じて国際的な交易を進めてきた西安は、現在も国際交流を重視した教育を行っているとのことであった。

日本では、国際理解教育を推進するにあたっては、まずは自身の住む地を知ることが重要だとし、国際理解教育と同時に郷土の学習が行われている。

西安は数千年という長い歴史のある都市であり、中国文化の発祥の地とも言われている。文明の歴史が7000年あまり、町としても3100年あまりの歴史があるという時の長さは、日本人の私たちには想像をはるかに超えるものがある。そのため西安には歴史的文化遺産が多く存在し、世界文化遺産も7カ所にのぼる。市内でも看板や物などに「長安」の文字が多く見られ、街の至る所で文化財を目にすることができる。

西安の小中学生も、歴史的建造物や古くからの教え、文化に触れながら育つことで、郷土に誇りをもって国際交流に臨むことができるだろう。

#### 【所感】

このように人的、物的リソースの充実した西安は、科学技術教育においても国際教育においてもすばらしい教育環境に恵まれているといえる。また、その環境を十分に生かせるよう、教育局によって80以上の小中学生の教育研修基地が設けられているという話も羨ましい限りである。リソースを十分に生かした教育を仕組む教育局や学校現場であるからこそ、科学技術イノベーション大会での実績や、数多くの国際交流事業の成果が挙げられるのだろう。

教育リソースの充実とそれを十分に生かそうとする教育者の姿勢、この両方が揃っていることが、西安市が「教育のまち」と呼ばれる所以なのだと思う。

## 西安交通大学附属中学校（曲江キャンパス）訪問（11月28日）①

### 【特色】

#### ・校訓

「弘徳廣識」

道德教育を促進し、徳を磨く教育を遂行するとともに、知識を深く掘り下げる教育を促す

「勵志篤行」

高い目標を掲げ基礎を築き、深い探究と明確な洞察で知識と行動の一致を達成する



【校舎の前面に校訓が掲げられている】

#### ・育人目標

生徒の全面的な発展と生涯にわたる成長に重点を置く

責任感を有し、新たに創造する能力の育成、国際的な視野をもち、品、学、体、美、勤労を兼ね備えた人材を育成するために一人一人の生徒にとって最適な成長を支援する



【生徒主体で日本語による学校紹介が行われた】

#### ・ School Motto

Virtue、Knowledge、Inspiration、Execution

#### ・特色のある課程

理科実験班、創新実験班、人工知能実験班、ドイツ語・日本語実験班、国際課程班などが設置されている。

・海外から物理学、化学、経済学などの研究者を招聘し、講義を行ってもらうなど、科学技術等の教育に力を入れている。



【国内外の著名な専門家を招聘して講演を聞く機会を設定】

・イギリス、フランス、韓国、日本など、多数の海外有名大学に進学する生徒を輩出している。

・運動や文化の部活動も盛んに行われており、特にバスケットボールが有名で、中国全土の全国大会で優勝するほどの高い実績を有している。



【優秀な学業成績を修める生徒が紹介されている】



【運動実績を上げた数々のトロフィーが展示されている】

#### 【プログラムの流れ】

1. 西安交通大学附属中学の学校紹介用動画視聴
2. 附属中学校長によるあいさつ
3. 団長によるあいさつ
4. 記念品贈呈

5. 附属中学日本語コースの生徒による学校紹介プレゼン
6. 附属中学日本語コースの生徒による日本語コース紹介プレゼン
7. 附属中学日本語コースの生徒による西安市の歴史紹介プレゼン
8. 附属中学日本語コースの生徒による西安市の特色紹介プレゼン
9. 附属中學生徒と訪中団教職員との個別自由交流
10. 附属中学校内施設見学
  - ・運動施設、タータントラック、人工芝のサッカー場、テニスコート、卓球場、学校史展示場、図書館など
  - ・体育授業見学、生徒と訪中教職員とのサッカー交流



【警校長と訪問団団長の記念品交換】

〔個別自由交流での意見交換内容例〕

- 日本教職員①
  - ・外国語（英語）の授業は小学3年生から始まる。
  - ・外国語の授業は週に3コマある。
  - ・保護者が英語への関心が高く、幼稚園から英語を学ばせる家庭も多いとのこと。
- 日本教職員②
  - ・男子生徒と対話した。日本のアニメ「ハンター」が好きで、2025年に訪日するので楽しみにしているとのこと。
  - ・土日も含めて休めることが少なく、疲れるとのこと。
  - ・日本の高校生の生活に興味があるとのこと。
- 日本教職員③
  - ・副校長との対話を通じて得た情報として、優秀な学業成績や運動スポーツ実績を上げるために、教員の資質能力向上やスキル獲得を図るプロジェクトが校内に組み立てられており、研修として外部の優秀な講師を雇うこともあるとのことであった。
  - ・学校独自で教員採用を行っており、公募をかけて試験を行う。書類審査と面接で20人に一人程度が選抜される。
  - ・朝は8時15分始業で11時30分に一度下校し、家で昼食と昼寝をして、午後は14時30分に再度登校して、合計1日8コマ授業を受けて、下校が17時30分頃になる。
- 日本教職員④
  - ・教頭先生との対話で、日本の学校紹介冊子を見せたら、避難訓練や健康診断、個人懇談などに興味を示された。
- 日本教職員⑤

・毎日1時間ずつ授業があり、ドイツ語と日本語は興味のある生徒が選択して受講できる仕組みになっている。

・日本語を学ぶ上で難しいのは文法と動詞の活用である。

#### ○日本教職員⑥

・生徒の英語は堪能。しかし授業での speaking の機会は少なく、座学で先生の話をお聴くことが多い。

・2年に1回、English festival があり、英語での劇やプレゼン発表を行っている。

・学校生活での不安について、受験へのプレッシャーが大きく、ストレスが高いとのこと。生徒から「日本の生徒も受験のプレッシャーは大きいですか？」と質問を受け、関心がありそうだった。

・学校生活で楽しいことについて、クラブ活動（この生徒はバレーボール部に所属）が楽しいとのこと。また、地域の人や大学生と交流することが楽しいとのこと。

・第二外国語の学習について、日本語、ドイツ語、スペイン語など、いくつかの外国語から選択できるとのこと。その中で最も人気があるのは日本語とのこと。

・将来について、「数学が苦手だけど、医者になりたい」とのことで、そのためプレッシャーも大きいとのこと。

・ドイツ語の先生との対話で「授業ではドイツ語を使っている」との発言があったため、授業においては第二外国語を教授言語として使用していることが推察された。

#### ○日本教職員⑦

・高校1年生の生徒との対話で、日本語を勉強し始めたきっかけを尋ねたところ「将来の選択肢が広がるから」とのこと。

・中国の大学受験で必須科目は、物理、化学、生物、国語、英語（または日本語）、数学とのこと。



【附属中生徒と訪中団教職員との交流場面】

#### 【所感】

西安交通大学附属中学は、中国の国家レベルの一流大学の附属校として高い評価を受ける学校である。「交通」という名称は、かつて交通部が大学を管轄していた名残であり、その歴史的背景が校名に反映されている。この学校には、校区内の住民にのみ受験資格が与えられるが、地方から移住してでも入学させたいと願う家庭が多いという。選抜試験に合格した生徒のみが入学を許可され、不合格の場合は他校への進学を余儀なくされる仕組みである。

教育方針においては、日本の佐藤学氏が提唱する「学びの共同体」の理念を取り入れている。校長が東京大学での学びを通じて得た知見を基に、「放牧的学習」という学習

者中心のアプローチを実践している。さらに、OECDのラーニングコンパスに見られる「生徒エージェント」の育成を重視し、探究的な学びを通じて生徒の総合的な資質・能力を伸ばそうとする姿勢が明確である。これらの取り組みは、VUCA時代と呼ばれる社会的変化に対応するための教育として、日本を含む先進国に共通する課題に取り組むものであると感じられた。

また、中国はPISAの結果を分析し、それを基に教育アプローチを検討しているが、自律した学習者の育成に関しては模索段階にあると見受けられた。一方で、教師の力量向上に対する取り組みは非常に積極的である。どの学校にも「優秀な教師」を紹介する展示があり、一流の教師によって生徒の資質や能力を引き出そうとする姿勢が強く示されている。そのため、校内では教師のスキル向上を目的とした研修プロジェクトが組織的に実施されており、頻繁に研修の機会が設けられている。外部講師を招き、専門的な講義や若手教師の支援を行うこともあるとのことである。

日本においては、国や自治体による法定研修が丁寧に行われている一方、校内研修の質や頻度にはばらつきが見られる。しかし、中国では学校ごとに研修が独自に組織化され、校長のリーダーシップの下、教職員の力量向上が力強く推進されている印象を受けた。また、教師の労働環境についても特徴的な点があった。追加補習について尋ねたところ、時間外労働は法律で厳しく規制されており、違法とされるとのことである。この規制により、日本以上に教師の労働者としての権利が守られていると感じられた。

今回の視察を通じて、中国と日本の教育の共通点と相違点を再認識する機会となった。特に、学校主導の研修体制や教師の働きやすさの確保といった点から、日本の教育現場における改善のヒントを得ることができた。このような取り組みは、生徒の学業成績の向上だけでなく、教師の専門性向上や教育の質を全体的に底上げするものであり、今後の教育改革において重要な示唆を与えるものであると考える。

## 西安交通大学附属中学校（曲江キャンパス）訪問（11月28日）②

### 【特色】

西安市という歴史の中心だった地に建つ学校として、歴史と伝統を重んじ、国際交流の発信地としての役割を果たしている。先進的な国際交流の取り組みによって、世界に進学先と友好都市を持ち、ネットワークを広げ続けている。

### SCHOOL MOTTO …VIRTUE KNOWLEDGE INSPIRATION EXECUTION

6つのコース授業があり、理科、人工知能、インターナショナルなど特徴ある授業を展開している。その中には2011年に設置された日本語学科があり、日本の大学へ進学している方もいる。芸術・運動・科学の面で多くの部活動を持ち、コンテストやコンクールへの参加実績も多く、優秀な成績をおさめている。また、優秀な教師陣と卒業生を持ち、国際社会で活躍する人材を育成輩出している学校である。



### 【プログラムの流れ】

校門前に校長先生が出迎えてくださり、案内された会場には日本語の授業を選択している生徒が約 20 名同席。

#### ①職員紹介

#### ②学校紹介動画の視聴（約 12 分間）

#### ③学校長挨拶

日本教育への高い評価、この交流を「学び合いの場」とする提案、教育は個性と主体性を重視、日中教育の発展を期待したい、西安という地だからこそ国際交流の重要性を体現していく、複数の国との国際交流の実績について、学びの共同体について実践

#### ④訪問団代表挨拶

名門難関校である訪問校への称賛、国際交流をリードする学校としての敬意、中日友好かつ、直接の交流を望む、より一層の中日の「繋がり」を教育の場で強化したい、「新たな教育のシルクロードをつくりましょう」

#### ⑤記念品交換

日本からは金箔の写真立て、訪問校からは学校フラッグ、紙の伝統工芸品

#### ⑥生徒(2年生)による日本語での学校紹介、西安市紹介、食文化紹介



#### ⑦訪問団と生徒との対話交流(約 15 分)

#### ⑧校内見学

設備の紹介(主に運動場、テニスコート、卓球場、バスケットコート、図書館、実績・表彰)



上記の中で、⑥⑦の生徒との時間が訪問団にとっては印象的だった様子。先生方も生徒との直接対話を楽しみ、多くの質問が飛び交っていた。日本語や英語を交えて、通訳さんの力も借りながらお互いの学校について情報交換を行った。習得している日本語のレベルの高さやプレゼンテーションでの堂々とした姿からは、日々の教育活動の充実さが伝わってきた。生徒が自信を持って学んだことを表現することができるということは、

受けている教育や自分の成長に誇りを持っていると言える。



### 【所感】

学んだことの一つ目は、特色ある学校づくりの点での魅力の発信についてである。この魅力を学校の強みとして大いに発揮していることが、生徒の自信と誇りにつながっている。生徒自身に、ここで学びたいと思わせる魅力が備わっていることは持続可能な教育につながる。日本でも今後この視点が必要になってくるのではないだろうか。生徒がここで学びたいと思う背景には、伝統と実績に加えて、革新的な学習、国際社会との繋がり、生徒が自己表現できる自由な雰囲気クラブ活動、教職員の向上心などがある。中国の活気ある高校の様子から、まずは自分の勤務校の強みを明確にし、チームでそれを魅力として発信できるよう模索したい。

二つ目は、生徒の主体性と積極性は希望だということである。日本語学科の生徒たちにも、運動場で共にサッカーをした生徒も、帰り際に私たちに手を振ってくれた生徒たちも、好奇心があって人に関わろうとする姿勢があったように思う。その社会性の高さは、豊かな人間関係を築く上で良い経験を与えてくれるはずだ。その開かれた教育と好奇心が、生徒との短い交流の中にも感じる事ができた。私に関わる生徒たちにも、外への好奇心を持ち続けられる様な、他者への関心を持ち続けられる様な開かれた価値観を教師として見せ続けていきたい。

## 兵馬俑博物館見学（11月28日）

### 【特色】

秦の始皇帝陵及び兵馬俑坑は、西安北東 30km にある中国の 5A 級観光地である。また、ユネスコの世界文化遺産にも認定されている。兵馬俑は、1974 年に秦の始皇帝陵の周辺で井戸を掘っていた農民によって偶然に発見された。2200 年前に造られた墓に眠る始皇帝を守るための兵士や馬の像である。訪問団は、中国のシンボルのひとつにもなっているこの兵馬俑を訪れる機会を得たことに胸を躍らせながら、市内から 1 時間ほどの兵馬俑博物館にバスで向かった。兵馬俑が発見されてからまだ 50 年あまりしか経っておらず、発見者もご存命であるという。全て発掘、修復されるには今後 100 年以上かかるだろうという説明に驚くとともに、2000 年以上地下で眠り続けた歴史の長さ思いを馳せる時間となった。

長さ 230 メートル、幅 62 メートル、深さ 5 メートルという広大な面積に並ぶ実物大の約六千体の兵・馬・俑の姿は壮観である。また、それぞれの表情、服装、髪型は異なり、一行は、そのひとつひとつに目を留めながらゆっくりと博物館内を回った。



## 舞台劇鑑賞『西安千古情』（11月28日）

### 【特色】

大きなテーマパークの中にある劇場で「西安千古情」を鑑賞した。「西安千古情」は、古代から唐代までの歴史における愛情物語を舞台劇にしたものである。

舞台は、狩猟・採集の古代から殷および周の時代の皇帝を頂点とした時代、秦の時代の始皇帝と兵馬俑の登場、漢の時代の北方民族の襲来や匈奴の脅威を表したシーンへと次々と移り変わった後、シルクロードを通じた西方との交易を経て唐の華やかな長安の都のシーンへと4幕の構成で展開した。

それぞれの時代の様子が迫力のある音楽やアクロバティックな踊り、最新の映像技術を駆使して演じられ、我々一行はすぐに劇の中へ没入していった。また、客席への人や動物の登場、水や砂の演出などで舞台と客席が一体化され、あたかも自分自身が物語の中にタイムスリップしたような感覚を覚えた。

最後に無数の中国国旗が登場し、客席を覆い尽くすシーンも圧巻であった。頭上にたなびく中国国旗からは、何千年にも渡る悠久の歴史を経て現在の中国があるのだという歴史の重みと、最初の都が置かれ、長きにわたって国の発展を担ってきた西安の地の誇りがひしひしと伝わってきた。



## 西安市第三中学校訪問（11月29日）①

### 【特色】

1903年に設立され、前身はイギリスの宣教師によって設立された尊徳中学であった。120年間の歴史がある。創立当初は女子中学であり、1943年から共学となる。4つのキャンパスを備える。

読書室、音楽教室、スタジオ、学生寮、化学実験室、小会議室、保健室、コンピュータ教室、図書室、スポーツテスト室、食堂、研究室、生物研究室、美術室、労働室、技術室、講義室、教員会議室、コンピュータネットワークセンター、放送室、多機能ホール、地理室、EEPO教室、学生休み時間活動、物理教育研究室、図書閲覧施設の紹介、多機能講堂、多機能会議ホール、マルチメディア講義室、科学技術室など多くの特色ある教室がある。

2018年4月の学校の公式ウェブサイトの情報では、この学校には上級教師25名、初級教師25名、二級教師54名を含む104名の教師がおり、1名が大学院の学位を持ち、8名が学士号を取得しており、92名が学士号を取得している。短大の学位を持っている。教師は教育への情熱と愛国心を持って学校経営を続けてきた。美德と学問を兼ね備えた人間を育成している。

学校理念は「尊道貴徳」「道と美德を尊重する」。道徳を尊重し、規律を守り、熱心に勉強し、革新する。



### 【プログラムの流れ】

- ・校長先生が学校説明をしながら学校内を見学。
- ・歴史や理念を念入りに説明しながら案内される。学校の設立の様子や学校行事など多くのパネルを見ながら、理解を深める。
- ・主にクラブ活動で使用される化学実験室を見学。
- ・グラウンドで生徒がランニングをしている様子を見学。



- ・授業を行っている教室を見学。数学の授業を行っていた。多くの生徒が授業を受けているのが印象的であった。



- ・図書館を見学する。図書館は教員の勤務とは別で、先生ではなく管理人が常駐をしている。そのため開館時間が日本より長い。(9:00～19:00)

- ・会議室で意見交換を行う。

西安市第三中学校校長「交流を機会に日本とコミュニケーションを深め、互いに学び教育理念を促進し、お互い発展をしていけるように一緒に頑張りたい。」



訪問団副団長「校訓である『道徳を守り、尊重し規律を守る』熱心に学ぶ姿、そして活発に動く、規律を守る子どもたちの姿が印象に残った。」

#### ・記念品交換



#### 【所感】

学校理念「尊道貴徳」にあるように道徳を尊重し、規律を守り、熱心に勉強する姿勢を言葉だけでなく先生一人ひとりからそういった想いを感じ取ることができた。教育に対して誇りを持って指導をしている様子に感心をした。

第三中学校では実際の授業を見学することができた。一斉授業の形式で、生徒たちは誰もが真剣に授業を受けていた。多くの人が見学に来るといのが影響しているかもしれないが、学びの姿勢に緊張感や、やる気を感じ取ることができた。また、グラウンドでは生徒たちがランニングをしている様子も見ることができた。生徒も教師も一緒になって、真剣だけれども少し楽しそうに一体感をもって活動をしていた。こういった活動を通じて、学校への帰属感やチームワーク、何事にも真剣に取り組むことなどが醸成されているのだと感じた。

日本では、子供の興味・関心を重視し、多様性が推進されるように変化をしてきた。探求学習やアクティブラーニングの導入がそれを物語っている。背景としてはグローバル化やデジタル化が進む中、多様な価値観やスキルをもつ個人の重要性が増しているからだと言われている。課題として自律的に学んでいくための方法が、まだまだ模索中であることや、学校間や地域による教育格差が拡大するリスクもある。

一方、中国はトップダウン型の教育を推進しており、国を支える科学技術や経済分野でのリーダーを育成するために、国家主導で教育が行われている。教員や学校施設へ多くの資金が投じられており、優秀で熱意を持った教員が指導を行っている。国としての政策が教育にも反映されており、急速な経済発展をこれからも維持・向上させるため、理工系教育をはじめとする高度な教育が展開されている。訪問先の生徒との交流の中で、ある生徒は受験のストレスや緊張感があることが悩みと言っていた。競争によりそういった悩みも抱えやすいのだと感じた。

日本と中国は相互補完の関係性を進めていくことで、双方ともさらに発展していく可能性があると感じる。双方が協力し、国際的な視点を持った人材を育成するための交流プログラムや、共通カリキュラムの策定を期待したい。

このように日本と中国の教育はそれぞれ異なる特徴と強みを持っているが、相互に交流や学び合いを進めていき補完しあうことで、より良い教育システムが構築できるのではと感じた。

## 西安市第三中学校訪問（11月29日）②

### 【特色】

前身は1903年に建てられた、西安市で最も古い西洋式のイギリス協会の学校である。最初は「尊徳」という学校名であったが、政府が引き継いでからは「三中」と改名した。かつては女子校であったが、現在では教師と生徒を含めて約7000人が在籍している。現在では4つのキャンパスがあり、メインキャンパスには約4000人の生徒が通っている。

学校の理念である「尊道貴徳」は正面玄関にある石碑にも書かれている。

〔正面玄関にある「尊道貴徳」〕

校訓：道徳を尊重し、規律を守り、熱心に学び新たな創造に取り組む。

理系の実験室などがあるが、希望した生徒が受講する。



### 【プログラムの流れ】

#### ①施設見学

- ・グラウンド、学校史展示場

#### ②授業見学

- ・体育（生徒たちがクラスごと？に列を組んで走っていた）
- ・数学（中学2年生の授業）

#### ③図書館見学

- ・AIを利用し自動で本を借りられるシステムの紹介
- ・生徒が本を借りやすいように図書館勤務の職員は出勤時間をずらしている。生徒が放課後に図書館を利用できる計らいがなされている。

#### ④学校長挨拶

- ・第三中学校の歴史の紹介
- ・120年経っても変わらない教育への情熱

#### ⑤訪問団副団長挨拶

- ・中国語で挨拶
- ・校訓を体現している
- ・印象に残った生徒たちの姿
- ・今後の展望

#### ⑥記念品交換

- ・日本からは金箔の写真立て
- ・第三中学校からは西安碑林博物館にある世界唯一の石碑である顔真卿（がんしんけい）という書道家の書

②の体育の授業も数学の授業も日本と異なる面も多々あり、多くの先生方が熱心に見入っていた。

### 【所感】

学んだことの一つは、教師自身が愛校心と誇りを持って働いていることである。学校史を紹介する場では、校長先生が自ら説明してくださり、こちらからの質問にも丁寧に

答えてくださった。特に「国防教育」「安全教育」「海上経路研学旅行」などの漢字でなんとなく意味が分かるものでも、通訳の方に説明してもらって初めてきちんと理解ができた。同じ漢字を使う文化圏であっても「きちんと知る」ことの大切さを知った瞬間でもあった。また、授業見学では対話型の授業では無かったが、どの生徒も学びに対して一生懸命取り組んでいる姿は、とても印象的だった。

また、学校経営についても学ぶことがとても多かった。例えば、警備員の方や司書の方は教員ではないことに驚いた。特に、図書館に勤務されている方は生徒たちの帰る時間に合わせて始業と終業の時刻をずらしていることを知り、残業をしなくても生徒の希望に寄り沿える社会が存在するのだと学んだ。

体育の授業が終わった後の生徒たちの姿は、日本の生徒と重なるところも多かった。また積極的に手を降ってくれたり、話しかけたりしてくれる生徒がいたことも、嬉しい時間であった。自分の生徒も私と同じように、直接、中国の生徒と接することで友好の輪は広がっていくのではないかと感じた。

## 資料編

### 参加者リスト

氏名（敬称略）	所属機関	役職
大西 浩之	日野市立日野第七小学校	校長
的場 秀騎	呉市立蒲刈小学校	教頭
青木 朋恵	埼玉県立越谷北高等学校	教諭
青野 遼	軽井沢町立軽井沢西部小学校	教諭
井上 篤	宮崎県立日南高等学校	教諭
大塚 親子	大垣市立西小学校	指導教諭
金子 綱基	甲府市立大國小学校	教諭
小林 翔太	調布市立第一小学校	教諭
下井 慈	阿智村立阿智中学校	教諭
陣野 俊彦	東京都立桜修館中等教育学校	主任教諭
高橋 謙介	山形県立小国高等学校	教諭
田中 哲也	白山市立明光小学校	教諭
東郷 尚子	私立水戸啓明高等学校	常勤講師
長瀬 基延	江南市立布袋中学校	教頭
長野 恭史	岩手県釜石市立双葉小学校	主幹教諭
西條 翼	久喜市立菖蒲中学校	教諭
西村 安里子	愛知県立明和高等学校	教諭
萩原 英輝	町田市立町田第四小学校	主幹教諭
長谷川 裕	愛知県立東海樟風高等学校	教諭
畠山 尚之	大阪教育大学附属高等学校池田校舎	教諭
濱田 那月	奄美市立小宿中学校	教諭
藤田 万愉子	上芳養中学校	教頭
渡辺 和宏	青梅市立第七小学校	教諭
新井 聡	文部科学省 総合教育政策局参事官（調査企画担当）付外国調査第二係	
山本 美来	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター	

## プログラム関係機関

### ●日本側機関

文部科学省/ Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology - Japan

### ●中国側機関

中国教育部/ Ministry of Education, The People's Republic of China

中国教育国際交流協会/ China Education Association for International Exchange

中華人民共和国駐日本国大使館 教育処/ Department of Education, Embassy of the People's Republic of China

### ●訪問機関

中国教育部/ Ministry of Education, The People's Republic of China

北京景山学校大興実験学校/ Beijing Jingshan School Daxing Experimental School

西安市教育局/ Xi'an Education Bureau

西安電子科学技術大学/ Xidian University

西安交通大学附属中学校/ The High School Affiliated to Xi'an Jiaotong University

西安市第三中学校/ Xi'an No.3 Middle School

### ●企画・実施・運営

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター/Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

---

文部科学省委託 令和6年度 新時代の教育のための国際協働プログラム  
初等中等教職員国際交流事業  
中国政府日本教職員招へいプログラム 実施報告書

---

2025年3月

編集・発行 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル

電話 (03)5577-2853

Email [exchange@accu.or.jp](mailto:exchange@accu.or.jp)

URL <https://www.accu.or.jp>

©2025 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)